

降臨節第3主日 ヨハネ1章6―8・19―28節

〔新共同訳〕

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

19 さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、20 彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。21 彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。22 そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」23 ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

24 遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。25 彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うとき、26 ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。27 その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」28 これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

①ヨハネ1章1―42節の文脈

①a 福音書全体の序文

ヨハネ1章1―18節は福音書全体の序文（プロローグ）となっている。この序文では

言（ロゴス）は神であり（1節）、

言が肉となって私たちの間に宿った（14節）、

それが父のふところにいる独り子、神であるイエス・キリストである（18節）

と主張されている。ここでは、ヨハネ以前に存在していた「ロゴス賛歌」を資料として用い、それにヨハネが加筆していると言われる。どこが加筆であるかについては、さまざまな見解があるが、洗礼者ヨハネについて述べる6―8節と15節は加筆部分だということでは一致している。

①b 洗礼者ヨハネからイエスへ

19―28節では、イエスはまったく登場せず、洗礼者ヨハネに焦点が向けられている。彼はメシアではなく、メシアを証しするために来た人である。29―34節では、洗礼者ヨハネは自分の方

に来るイエスを指し示しながら、彼が「世の罪を取り除く神の小羊」であり、「神の子」であると紹介する。イエスは姿を見せるだけで、言葉は口にしない。35―42節では、洗礼者ヨハネの二人の弟子は、彼に促されて、イエスに従う。この段落になって、イエスが初めて口を開く。それと共に、洗礼者ヨハネについては一言も語られなくなる。こうしてメシアを「証し」するために来た洗礼者ヨハネは消え、イエスを中心とする物語が始まっていく。

②全体の構成

- 19 「あなたは 誰で あるか」
21 「では何か あなたは エリヤであるか」
22 「誰で あなたはあるか」
 答えを私たちが与えるようにと 私たちを送った者たちに、
 何を あなたは言うか あなた自身について」

19節と22節に「あなたは誰であるか」とあり、21節と22節に「あなたは何か・何を言うか」とあるように、主題は洗礼者ヨハネが誰であり、何を使命としているのかにある。

①第一段落（6―8節）

- 6 現れた 人が、遣わされて 神から、名前は 彼にとって ヨハネ。
7 この人は 来た 証しのために、
 証しするようにと 光について、皆が信じるようにと 彼を通して。
8 彼はなかった 光で、むしろ 証しするようにと 光について。

ここでは「証しする」が名詞形と動詞形で、合計三回使われている。ヨハネにとって、洗礼者ヨハネは「光」ではなく、光について「証しする」人である。

②第二段落（19―21節）

19―28節では、ユダヤ人が派遣した者たちが洗礼者ヨハネと交わす問答によって、洗礼者ヨハネの「証し」が明らかにされるが、この段落では彼の答えはすべて否定形である。人々は彼が「キリスト」「エリヤ」「あの預言者」ではないかと考えているが、洗礼者ヨハネはそれを否定する。

③第三段落（22―23節）

ユダヤ人が派遣した者たちは、この否定の答えに苛立ったかのように、長い問いを繰り返すと（22節）、洗礼者ヨハネはイザヤ40章3節を使って、自分は「荒れ野で叫ぶ者の声」にすぎないと答える。

④第四段落（24―28節）

この段落では「洗礼を施す」が三度くり返され、洗礼者ヨハネが行っていた洗礼活動の意義がテーマとされる。彼の施す洗礼は「キリスト」や「エリヤ」や「あの預言者」であることとしるとはならない。彼の後に、彼を超えた者が来る。

③ヨハネの証し

①証しするため（6―8節）

⑦「証しする」という言葉が、動詞形と名詞形で三回用いられており、洗礼者ヨハネの役割が「証し」という一点に絞られている。ヨハネ福音書では、受肉した神の子の業と働きが「光」にたとえられるが、洗礼者ヨハネはそのような光ではない。むしろ、この光について「証しする」ために来たのであり、「すべての人々が信じるように」と証しすることが彼の役割である。

②証しする（マルテュレオー）

この動詞は事実や出来事を宣言したり、確証することを指して「証明する、証しする」（ロマ一〇二）の意味で使う。「誰かに対して何かを証しする」（ヨハ三二八）、良い意味で、「（直接の観察に基づいて）誰かに有利な証言をする」（ルカ四二二）、悪い意味で「誰かに不利な証言をする」の意味にもなる（マタ二三三一）。

新約聖書には76回の用例があるが、ヨハネ文書での用例が過半数を占めている。ヨハネの用例のほとんどは、「イエスについて証しする」というように、イエスを証しの内容としているが、その場合、イエスの生涯に見られた出来事を単純に「証しする」だけでなく、イエスは誰なのか、その本質を「証しする」ことをも含んでいる（ヨハ五三以下）。イエスを「証しする」のは洗礼者ヨハネであり（一七・八）、神であり（五三二）、イエスの業であり（五三六）、聖書であり（五三九）、イエス自身であり（八一三・一四）、聖霊であり（一一五二六）、イエスの弟子である（一一五二七）。

ヨハネ文書での証しは告白である。ヨハネ福音書とヨハネの手紙一では、証しする人が直接の目撃者であることが力説されることもあるが（一ヨハ一―二）、証しはキリストの栄光の証しでもあるから（ヨハネ一四、一ヨハ五九―一〇）、目撃証人ではない人も「証しする」ことができる。そのような証しは、イエスが誰なのか、彼が何を示されたかを「告白する」ことと同じである。

共観福音書が伝える洗礼者ヨハネは、悔い改めの洗礼をイスラエルに呼びかけ、来たるべきイエスの道を準備する者であるから（マコ一四―八）、使われる動詞も「準備する」と「洗礼を施す」である。これに対してヨハネ福音書では、彼の役割はイエスが誰であるかを「証しする」証人となることに集中している（二二九・三二・三四・三六）。従って、共観福音書が洗礼者ヨハネには決して使わないこの語をヨハネ福音書は洗礼者ヨハネに用いている。ちなみに、共観福音書ではこの語は2回しか使われない（マタ二三三三、ルカ四二二）。

このような事実から分かるように、ヨハネ福音書での洗礼者ヨハネ像は共観福音書での像とは違っており、「最初のキリスト者」と言えるほどに、キリストに接近している。彼はイエスが誰であるかを証しする「声」なのであり、その声に促されて、洗礼者ヨハネの弟子たちはイエスのもとに向かい、イエスの弟子となる（一一三七）。さらに弟子たちだけでなく、すべての人が彼の証しによって、イエスのもとに集まっている（三二六）。

③人々の期待を否定する（一九―二一節）

⑦ここでは、「あなたは誰か」という問いが三回も洗礼者ヨハネに向けられるが、彼の答えはいずれも否定形である。

「あなたは誰ですか」↓「私はメシアではない」
「エリヤですか」↓「私ではない」
「あの預言者ですか」↓「ない」

「エリヤ」は、マラキ3章23節「見よ、わたしは、大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす」に基づいて、終わりの日の再来を待望されていた。「あの預言者」は、申命記18章15・18節の「モーセのような預言者」を指す。「エリヤ」も「あの預言者」も、メシア（救い主）と並び、終末時に到来が期待されていた特別な人物であるが、洗礼者ヨハネは自分がそれであることをきっぱりと否定する。

20 そして 彼は告白した そして 彼は否定しなかった、
そして 彼は告白した 次のことを、「私は キリストではない。」

それは「告白する」と訳した動詞（ホモロゲオー）を20節で二回も繰り返していることにも現れている。彼は人々の期待や予想の間違いをはつきりと「告白した」のである。しかも、三回の否定は段々と短く、素っ気ないものになっている。このような変化は否定を強めると同時に、続く23節の肯定形による返答をいっそう印象深いものにしてている。

④告白する（ホモロゲオー）

この動詞は、世俗的・ヘレニズム的用法と同じように、「約束する、承諾する」の意味でも使う（たとえば、マタ一四7でヘロデが義理の娘に、望みをかなえてやると「約束する」という用例）。しかし、大多数の用例では「告白する・言い表す・公言する」の意味である。この場合、

法律用語として、「言い表す・公言する」（ヨハ一20）

こうした法律用語としての用法から転じて「罪を認め、告白する」

共同体やキリスト者が罪の赦し、すなわちイエス・キリストによる救いを得たことを「公に表明する」の意味で使われる。

ヨハネが告白について語る場合に常に問題にしているのは、個々の教義ではなく、真理そのものである。この真理によって、神と結ばれるかどうかが決まる。真理は文字に書かれたものではなく、イエスという人そのものの内にある。だから、告白とは自分がキリストの業を信じ、キリストに従って生きることを表明することである。

20節のように、反対語のアルネオマイ（否定する）と対比して用いられる場合、ホモロゲオーは特別な意味を持つ（ヨハ一20）。「否む」とは「イエスから離れる」の意味であり、「否定しなかった」は「イエスから離れずに」の意味と考えられる。そうであれば、前後に置かれた「告白した（公言した）」とのつながりがはつきりする。

人々の前でイエスを自分の仲間だと言うか、イエスを知らないと言うかによって、神の裁きが決定される（マタ一〇33）。キリスト者は絶えずキリストに結ばれて生きているので、人前で（たとえば迫害の時に法廷で）告白するのは、神の前で告白するのと同じである。

◎荒れ野で叫ぶ者の声に徹する（22―23節）

23 彼は語った、

「私は『叫ぶ者の声 荒れ野で。』

あなたがたは真つ直ぐにせよ 主の道を、『

言ったように 預言者イザヤが』。

⑦ 22節の「何を あなたは言うか あなた自身について」という問いに対して、洗礼者ヨハネは、「私は『主の道を真つ直ぐにせよ、と荒れ野で叫ぶ者の声』」だと告白し、自らが「声」にすぎないと言う。洗礼者ヨハネの任務は、主の到来に備えるようにと告げる「声」に徹することであった。

⑧ イザヤ40章3節「主の道を真つ直ぐにせよ、と荒れ野で叫ぶ者の声」は、共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ福音書）でも洗礼者ヨハネを指すものとされるが、ヨハネ福音書だけがこの引用の前に「私は」を置いている。つまり、共観福音書では、福音書記者がイザヤ40章3節の「声」を洗礼者ヨハネと同定するが、ヨハネ福音書では、洗礼者ヨハネ自身が行ったことになる。こうして、洗礼者ヨハネの「声」としての役割がいつそう強調されることになり、その結果、この「声」の指示する「来たるべき方」の影に注意が向けられていく。

④私後に来る方（24―28節）

⑦ 洗礼者ヨハネが人々の期待や予想を否定し、「荒れ野で叫ぶ者の声」にすぎないと答えたので、派遣された人々は、なぜ特別な人物でもない洗礼者ヨハネが洗礼を授けるのか、とあらたな問いを投げかける。それに答えて、「私は水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」と述べる。

「私は 洗礼を施す 水で。

あなたがたの間に 立っている、その者を あなたがたは 知らない、

私の後に 来る者が

その者の 「私は」 ふさわしくない 私が解くためには 彼の履物のひもを。」

ヨハネ福音書は、共観福音書と同様に、洗礼者ヨハネの洗礼は「水による洗礼」だと述べるが、「聖霊による洗礼」についてはいつさい言及しない。ヨハネ福音書の興味は「水の洗礼」と「聖霊による洗礼」の対比にはなく、むしろ「私の後に来る方」の力強さと偉大さを力説することにあるからである。洗礼者ヨハネ以上の存在であることを示すことに関心がある。

⑧ その方は「あなたがたの知らない方」、つまり人間の経験や知識を超えた方である。その方を「証しする」ことが洗礼者ヨハネの使命である。洗礼者ヨハネが自分ではないと否定し（第二段落19―21節）、むしろ声となって指し示した方は「私の後に来る方」であり、「あなたがたの間に」立っている方であり、洗礼者ヨハネが「彼の履物のひもを解くのにふさわしくない」、

それほどの方である。

④後から来る方を証しする声として生きる

①ユダヤ教では祭儀的な清浄さを保つことが大事にされており、クムラン宗団（死海のほとりで共同生活を送ったユダヤ教の一派）の沐浴は特に有名である。しかし、それは何度も繰り返される儀式であって、一回限りの、入信のための儀式ではない。改宗者に洗礼を施すことはユダヤ教でも行われたが、紀元後80年以前にすでに実施されていたかどうかははっきりしない。これらに対して、洗礼者ヨハネの洗礼運動は、罪の赦しを与え、来たるべき神の怒りから救うことを目的としている。ユダヤ教の洗礼が強調するのは、グループの一員となるという法的な側面であるが、洗礼者ヨハネの洗礼では終末との関わりが重視されている。

②そのような洗礼者ヨハネの使命は、ヨハネ福音書では、来たるべき方を「証しする」ことであると語られる。洗礼者ヨハネはまだイエスに会ってはいないが、自分を遣わした方によってイエスを知っている。洗礼者ヨハネは神によって教えられたことを証しする。

③従って、彼の証しの内容は、体験に基づくイエスの人柄や振る舞いではなく、遣わした方によって教えられたその本質である。彼は人々が知らないことを神から教えられて知っている。ここに洗礼者ヨハネの特別な役割がある。だから彼はこの方の本質を指し示し、すべての人が信じるようにと呼びかける。

④ヨハネ福音書では、イエスの最初の弟子となるのは、洗礼者ヨハネの弟子であった者たちである。洗礼者ヨハネはイエスを見つめ、「見よ、神の小羊だ」と二人の弟子に告げる。二人の弟子はその声に促されて、イエスについて行き、イエスの弟子となる。洗礼者ヨハネの呼びかけから、メシアとの出会いが起こる。

⑤ヨハネの弟子たちは「みんながイエスの方へ行く」と言って、動揺する（ヨハ三26）。ヨハネは「自分がメシアではなく、イエスの前に遣わされた者である」と言っていたことについては、「あなたたち自身が証ししてくれる」と語っている（ヨハ三28）。ヨハネの弟子たちは確かにヨハネの証しを聞いていたが、ヨハネを「ラビ」と尊敬する彼らには、「証し」というヨハネの使命の重さを悟ることができない。そこで、ヨハネは花婿のたとえを用いて、自らが果たすべき使命とそれがもたらす喜びを、彼らに教える。「介添え人」と訳されている語は、直訳すれば「友人」となる。花婿の友人は、結婚をとりまとめる際に仲立ちをする者であり、結婚式では特別の役目を持つ。その役目をヨハネは「そばに立って耳を傾ける」と表現している。ヨハネの喜びは「花婿の声を聞くこと」にある。自分が語るのではなく、イエスが語る神の言葉を聞くことをヨハネは求め、それを何ものにも優る喜びとした。ヨハネが行った証しはその喜びが語らせた言葉である。

⑥マタイ福音書とルカ福音書では、洗礼者ヨハネは牢獄から弟子を遣わして、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と尋ねさせている（マタイ3、ルカ七19）。これに対して、ヨハネ福音書の洗礼者ヨハネは、イエスをメシアと確信することができないのではなく、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」と語り（ヨハ三30）、イエスこそが来るべき方であることを認める者として描かれる。神の言葉に栄光が帰されるために、自らは消え行く者として生きるヨハネは、宣教者のあるべき姿を示している。